

原著

看護大学生の自己教育力に影響する要因

～ローカスオブコントロール, ストレス耐性, 高校時代の委員会活動の影響～

道廣睦子¹⁾, 藤田佳子¹⁾, 浅井美穂²⁾¹⁾ 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科²⁾ 岡山労災病院

抄録

本研究は、看護学生の自己教育力とローカスオブコントロール、ストレス耐性との関連を明らかにすること、ストレス耐性にどのような要因が影響を与えているかを検討することであった。対象はA県B大学の看護学生182名の自記式調査を基礎にパス解析にて検討した。その結果、自己教育力とローカスオブコントロール間に強い関連が、また、高校時代の生徒会活動、委員会活動がストレス耐性を高めることが明らかになった。以上の結果は、看護学生の自己教育力の強化はストレス耐性を高めること、つまり良い生活習慣、ポジティブな生活態度を持つことの必要性が示唆された。

Key words : 看護学生, 自己教育力, ローカスオブコントロール, ストレス耐性

I. はじめに

1989年に告示された小学校・中学校及び高等学校の学習指導要領では、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力の育成を図る」ことが各学校の努力目標として掲げられた¹⁾。また、わが国においては少子高齢化がすすみ、高度医療や在宅医療の進展など保健・医療・福祉を取り巻く社会情勢の変化と国民のニーズが高まり、そのニーズに対応していくために、看護系大学は確かな専門性と豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い看護職者の育成が期待されている²⁾。1994年には、大学基準協会から「期待される看護専門職像」が提言され、「看護専門職にあるものは、多様にしかも急速に変化しつつある社会情勢を認識し、生涯を通して最新の知識、技術を学習し続ける²⁾」とされ、主体性、創造性、積極的な行動能力など自己教育力の育成が重要であることが示唆された。

看護学生の自己教育力の構成概念は、梶田³⁾、北尾⁴⁾、西村⁵⁾により明確にされ、「学習の技能と基盤」「成長発展への志向」「自己の対象化と統制」「自信・プライド・安定感」の4因子が主流として多くの研究に使用されている。そのほか、平久江⁶⁾は、4つの要素として主体的な学習、問題解決、学習の仕方、情報の活用をあげ、情報活用能力の育成が自己教育力の育成につながるとの興味深い概念を主張している。自己教育力に関係する要因としては、伊藤⁷⁾は概論の授業への課題解決学習の導入、土屋ら⁸⁾は、実習方法の工夫、池田⁹⁾は学習態度の変容が自己教育力の育成に影響があることを述べている。さらに原¹⁰⁾は、「看護職アイデンティティ」と自己教育力との相関がみられること、森¹¹⁾はセルフエフィカシーの高い学生は自

己教育力が高いことを報告している。また、看護学生の自己教育力と学習方法、学習意欲、劣等感などの関連性についての報告¹²⁾もなされている。

しかし、複雑な社会状況にあつて、ストレス耐性との関連についての研究はなされていない。

山本¹³⁾は、同等のレベルの心理社会的ストレスにさらされる時、ライフスタイルの良い人やソーシャルサポートのある人はストレス抵抗性が有り心身のストレス反応の出にくいことを報告し、健康的な社会生活を送る人の良き生活習慣、良き生活状況、ポジティブな生活態度、よきソーシャルサポートなどをストレス耐性とした。また、ストレス耐性の低下がストレス度を高め、生活時間の自己決定ができることはストレス耐性が高いと報告している¹³⁾。

そこで、今回自己教育力の必要性が重要であることが臨教審において答申され、小学校、中学校、高等学校において自己教育力を育成され、高校生時代において委員会活動、ボランティア活動、生徒会活動に参加していた学生はポジティブな生活態度をもっていると仮定した。

ローカスオブコントロール (LOC) については、外的統制型よりも内的統制型の学生の方が学業成績が高いなど内的統制型のパーソナリティの利点が多く報告されている¹⁴⁾。このことから、高校生時代の委員会活動、ボランティア活動、生徒会活動をしていた学生はポジティブな生活態度をもっていると仮定し、ストレス耐性の高い学生は自己教育力が高い。ローカスオブコントロールの高い学生はストレス耐性が高く自己教育力が高いという仮説のもと、研究を行った (図1)。

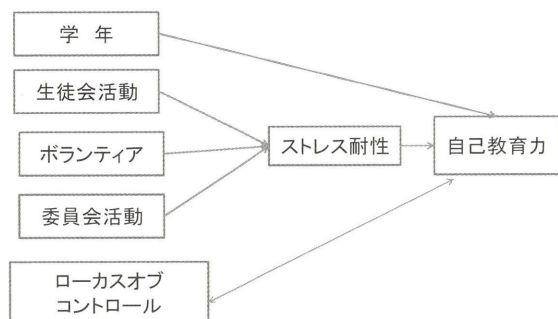


図1. 研究の枠組み

II. 方法

1. 調査の対象

調査は、自己記入式調査法により、2006年4月から5月の2ヶ月にわたって実施した。調査対象はA県にあるB大学の看護学生182名とした。

2. 調査内容

主な調査内容は以下の通りである。まず対象者の基本的属性として性、年齢を尋ねた。また学生の背景要因として、自己教育力に個人的な背景が影響すると考えられるため、家族構成、高校生時代の活動・役割の有無等取り上げた。

自己教育力は、西村⁹⁾らが作成した自己教育力測定尺度の40項目を使用。各項目に対する回答は、「4点：そう思う」「3点：ややそう思う」「2点：あまり思わない」「1点：思わない」の4段階評定で求めた。従って得点が高いほど自己教育力が高いことを示すように設定した。なお、項目の8・9・10・18・19・20・30・37・38・39・40は反転項目であるため、得点化を反転させて行った。西村の自己教育力尺度は、内的妥当性、信頼性および看護職アイデンティティとの併存的妥当性が検証されている。

ストレス耐性は桂¹⁰⁾が作成したストレス耐性度チェックリストの20項目を使用した。80点満点で構成され、判定基準は45点以下をストレスに弱い、46～54点をやや弱い、55～69点を問題なし、70点以上はストレスに強いとしている。各項目に対する回答は、「1点：めったにしない」「2点：時に」「3点：しばしば」「4点：いつも」の4段階評価で求め、得点が高いほどストレス耐性能力が高いことを示すように設定した。なお、項目の5・7・9・18・19は反転項目であるため、得点化を反転させて行った。なお、桂のストレス耐性尺度の信頼性(内的整合性、妥当性)の検証はなされている。

学生の統制感(Locus of Control)とは、人間は自分自身の行動と強化の統制が可能であるという信念を持って

いるかどうか、行動を予測する上で重要な要素となるもので、鎌原等¹⁰⁾の作成した成人用一般的Locus of Control尺度を用いた。本尺度はRotterの尺度および他のLOC諸尺度を参考に作成したもので、統制感、帰属、行動的方略を包括するように設定され、「そう思う」と答えればInternalと見なされるI項目と、「そう思う」と答えればExternalと見なされるE項目とが同数となるように作成されており、信頼性の検証はなされている。

3. 倫理的配慮

本研究は教員が実施し、対象者は学生であるということから、研究参加の同意を得るため、調査を依頼する際、研究の主旨と内容について説明し、研究への参加は自由意志であり、任意に基づくものであることを明記した。また、調査は無記名で、個人特定はしないこと、調査協力の有無や回答内容については学業成績とは関係しないことを説明した。

4. 分析方法

統計解析には、いずれの調査項目にも欠損値のない155名のデータを使用した。まず、本研究では、西村の自己教育力尺度を用いた。内的妥当性、信頼性および看護職アイデンティティとの併存的妥当性が検証されているが、因子分析の結果、「自己の対象化と統制」の領域の因子負荷量が低く分散されたため、分析には西村の自己教育力尺度の40項目のうち、平均値の高い代表的な20項目を選び分析の対象とした。(表2)

5. 操作的定義

自己教育力とは、「自分自身で学び、成長発展してゆける力」であり、「成長発展への志向」「自己の対象化と統制」「学習の技能と基盤」「自信・プライド・安定性」の4つの側面から構成されるものとする⁹⁾。

ストレス耐性：よい生活習慣、よい生活状況、ポジティブな生活態度をもち、ストレスや様々な精神的な問題に対応できる能力¹⁰⁾。

Locus of Control：人間は自分自身の行動と強化の統制が可能であるという信念。

III. 結果

1. 対象者の属性

182名に調査表を配布し、最終的に161名の記入済み調査表が回収された(回収率88.5%)。このうち、統計解析にはいずれの調査項目にも欠損値のない155名のデータを分析対象とした(有効回収率85.2%)。回答者の平均年齢は、19.9歳(SD±1.83)最高年齢31歳、最低年齢18歳であった。性別は男15名(9.3%)、女性146名(90.7%)であった(表1)。

表1 学生の背景 名(%)

学年	1年生	41(25.5)
	2年生	40(24.8)
	3年生	45(28.0)
	4年生	35(21.7)
家族構成		
	核家族	99(61.5)
	拡大家族	60(37.3)
	その他	2(1.2)
生徒会活動		
	有	12(7.5)
	無	149(68.9)
ボランティア活動		
	有	22(13.7)
	無	139(66.3)
委員会活動		
	有	32(19.9)
	無	129(65.1)

2. 看護学生の自己教育力

看護学生の自己教育力は4つの領域で構成され、一番得点の高い領域は「成長・発展への志向」であり、「5.自分がやり始めたことは、最後までやり遂げた」3.53(標準偏差±0.60)「2.自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろ努力したい」3.49(標準偏差±0.64)、「7.これから専門的な資格や学位などをとりたい」3.45(標準偏差±0.75)「4.自分でなければやれないことをやってみたい」3.44(標準偏差±0.74)などで構成されている。次に得点が高かった領域は「自己の対象化と統制で「11.自分の良くないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている」3.10(標準偏差±0.71)、「14.他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようとする」3.26(標準偏差±0.64)であった。また、「学習の技能と基盤」は、「29.取り組みたいことによって、それにあった学習方法や手続きを調べる」2.63(標準偏差±0.76)「22.自分の調べたいことについての文献検索していくことができる」(2.89 標準偏差±0.96)「24.考えを深めたり広げたりするのに話し合いや討議を大切にしている」(2.81 標準偏差±0.91)であった。平均点の低かったものは、「自信・プライド・安定性」であり、「32.今の自分は幸せだと思う」2.97(SD0.92)、「35.今の自分に満足している」2.24(標準偏差±0.95)であった。「38.ときどき自分自身が嫌になることがある」1.92(標準偏差±0.84)など「自信」の平均点が低かった(表2)。

3. ローカスオブコントロール

個人特性として、パーソナリティの測定指標であるローカスオブコントロールの結果は表3の通りである。尺度得点の平均、36.7点、標準偏差5.15であった。得点の可能な分布範囲は、14.0~52.0で得点が高いほど、Internal傾向(内的統制感)が強い。

4. ストレス耐性と自己教育力の平均得点の比較

本サンプルにおけるクロンバックの α 信頼性係数は尺度全体で0.743であり一次元の測定尺度とみなして単純加算した。その結果、ストレス耐性は80点満点中、平均55.9(標準偏差±6.8, 範囲39~74)。ストレス耐性得点45点以下「ストレス耐性1」であった人は11名(6.8%)、46~54点「ストレス耐性2」であった人は56名(34.8%)、55~69点「ストレス耐性3」であった人は91名(56.5%)、70点以上「ストレス耐性4」であった人は3名(1.9%)であった。そこで、大学生の自己教育力とストレス耐性との関係を調べた。ストレス耐性1~IVまでに所属する学生の自己教育力の領域別の平均値を出し、得点の比較を行ったところ、「学習の技能と基盤」において、ストレス耐性IVとI・IIの間に、ストレス耐性IIIとIIの間に有意差がみられた($p<0.05$)。また、「自己の対象化と統制」では、ストレス耐性II・IIIの間に、「成長・発展への志向性」は、IIIとI・IIの間に有意差がみられた($p<0.05$)。いずれもストレス耐性の高い学生の方が「学習の技能と基盤」得点が高かった。「自信・プライド・安定性」においては、IVとI・II、IIIとI・IIの間に有意差がみられた($p<0.05$)。つまり、ストレス耐性の強弱によって自己教育力に強い影響があることが明らかになった(表4)。

5. 高校時代の生徒会・委員会活動経験の有無と自己教育力の平均値の比較

高校時代の生徒会・委員会活動の経験の有無が自己教育力に影響を与えるかその関係を調べたところ、生徒会活動は「学習の技能と基盤」に、委員会活動は「自己の対象化と統制」「成長・発展への志向」に有意差がみられた。(表5 表6)

6. 自己教育力とストレス耐性、学生の高校時代の活動との関係

高校生時代の委員会活動、ボランティア活動、生徒会活動をしていた学生はポジティブな生活態度をもっていると仮定し、ストレス耐性が高く、ストレス耐性の高い学生は自己教育力が高い。ローカスオブコントロールの高い学生は自己教育力が高いという仮説のもと、図1で表記した因果関係モデルを設定しパス解析を行った。その結果、GFI=0.970, CFI=0.897, RMSEA=0.095, であった(図3)。GFIは0.9以上を上回っており、CFI

表2 看護大学生の自己教育力の平均値

	項 目	平均点 (標準偏差)	合計点 (標準偏差・範囲)
学習の 技能 と基盤	29. 取り組みたいことによって、それにあつた学習方法や手続きを調べる	2.63(0.76)	13.17(3.34, 5-20)
	22. 自分の調べたいことについての文献検索していくことができる	2.89(0.96)	
	24. 考えを深めたり、広げたりするのに話し合いや討議を大切にしている	2.81(0.91)	
	23. 他の人の話を聞いたり本を読む時、ときどき内容を振り返りまとめてみる習慣がある	2.43(0.95)	
	27. 自分に必要な文献や記録を分類整理しておく習慣がある	2.41(0.96)	
	26. 自己評価するときには、自分の目標をてらして行っている	2.51(0.89)	
	21. 自分の調べたいことがある時に、図書館(室)を利用している	3.19(0.89)	
	25. 考えていることを筋道たてて書いたり、伝えたりできる	2.41(0.89)	
	30. 例え話などを用いて人にわかりやすく、説明することが苦手である	2.27(0.91)	
	28. わからないことがあるとすぐ人に聞く傾向がある	3.03(0.83)	
自己の 対象 対象化 と統制	17. 嫌になった時でも、もうちょっとだけ、もうちょっとだけ頑張ろうとする	2.94(0.84)	15.16(2.41, 8-20)
	16. 腹がたつてもひどいことを言ったりしないように注意している	2.97(0.76)	
	13. 自分のよいところ悪いところがよくわかっている	2.89(0.78)	
	11. 自分の良くないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている	3.10(0.71)	
	14. 他の人から欠点を指摘されると、自分でも考えてみようとする	3.26(0.64)	
	12. 自分の考えや行動を批判されても腹を立てない	2.32(0.83)	
	15. できるだけ自分を押さえて、他の人に合わせようとしている	2.79(0.83)	
	19. テレビを見てしまつて、勉強がやれないことが多い	2.08(0.96)	
	18. 疲れているときは何もしたくない	1.70(0.88)	
	20. ちょっと嫌なことがあると、すぐ不機嫌になる	2.33(0.85)	
成長・ 発展へ の志向	2. 自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろ努力したい	3.49(0.64)	16.97(2.70, 7-20)
	4. 自分でなければやれないことをやってみたい	3.44(0.74)	
	1. 将来、他の人から尊敬される人間になりたい	3.22(0.72)	
	6. これからも良い仕事をして、多くの人に認められたい	3.28(0.73)	
	5. 自分がやり始めたことは、最後までやり遂げたい	3.53(0.60)	
	7. これから専門的な資格や学位などをとりたい。	3.45(0.75)	
	8. 一体何のために勉強するのだろうかとかと嫌になることがある	2.32(1.01)	
	9. ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い	2.17(0.90)	
	10. 人の人生は結局偶然のことで決まると思う	2.74(0.87)	
	3. たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい	3.43(0.74)	
自信・ プライド 安定性	35. 今の自分に満足している	2.24(0.95)	12.88(3.41, 5-20)
	33. 自分のやることに自信を持っている方だと思ふ	2.52(0.89)	
	34. 生まれ替わるとしたなら、やはり今の自分に生まれたい	2.32(0.99)	
	32. 今の自分が幸せだと思ふ	2.97(0.92)	
	36. 自分にもいろいろとりえがあると思ふ	2.82(0.79)	
	38. ときどき自分自身が嫌になることがある	1.92(0.84)	
	37. 今の自分ではいけないと思ふことがある	1.76(0.81)	
	40. 自分のことを恥ずかしいと思ふことがある	2.16(0.91)	
	39. 何をやってもだめだと思ふ	2.43(0.92)	
	31. 他の人に馬鹿にされるのは、我慢できない	2.72(0.90)	

* 各領域の代表的な項目 5 項目の合計点を使用

表3 LOC 尺度項目の内容と平均, 項目一得点相関

項目内容		平均(標準偏差)	項目間の相関
1 何でも, 成り行きにまかせるのが一番である.	E	2.70(0.84)	.58
2 自分は, 努力すれば立派な人間になれる.	I	3.04(0.77)	.46
3 一生懸命に話せば, 誰にでも, わかってもらえる.	I	2.86(0.84)	.40
4 自分の人生を, 自分自身で決定している.	I	3.10(0.82)	.45
5 人生は, 運命によって決められている.	E	2.70(0.82)	.50
6 幸福になるか, 不幸になるかは偶然によって決まる.	E	2.90(0.81)	.52
7 自分の身に起こることは, 自分のおかれている環境によって決定されている.	E	2.37(0.76)	.34
8 どんなに努力しても, 友人の本当の気持ちを理解することはできない.	E	2.79(0.88)	.34
9 人生は, ギャンブルのようなものである.	E	2.77(0.95)	.57
10 将来, 何になるかについて考えることは役に立つ.	I	3.24(0.77)	.47
11 努力すれば, どんなことでも自分の力ができる.	I	2.80(0.73)	.46
12 たいいていの場合, 自分で判断した方が, 良い結果を生む.	I	2.59(0.84)	.21
13 幸福になるか, 不幸になるかは自分の努力しだいである.	I	3.10(0.77)	.59
14 自分の人生を思いどおりに生きることができる.	I	2.59(0.86)	.40
15 将来は, 運やチャンスによって決まる.	E	2.57(0.82)	.52
16 自分の身に起こることは, 自分の力ではどうにもならない.	E	2.74(0.72)	.39
17 努力すれば, 誰とでも友人になれる.	I	2.90(0.89)	.24
18 努力するかどうかを, 成功するかどうかはあまり関係がない.	E	2.91(0.92)	.23

1) 平均は高いほど Internal 傾向が高くなるように設定されている
 2) 項目と当該項目を除いた他の項目による得点との相関関係

表4 ストレス耐性と領域別自己教育力の平均得点の比較

平均値(標準偏差)

	n	自己教育力				総合点
		学習の 技能と基盤	自己の対象化と統 制	成長・発展への 志向	自信・プライド・ 安定性	
ストレス耐性 I (45 点以下)	11	12.4(4.2)	14.9(3.1)	15.4(4.4)	10.3(3.9)	52.9(12.7)
ストレス耐性 II (46-54 点)	52	11.9(2.9)	14.2(2.4)	16.1(2.6)	11.6(2.6)	53.9(6.5)
ストレス耐性 III (55-69 点)	89	13.8(3.2)	15.7(2.2)	17.6(2.3)	13.8(3.4)	60.8(7.5)
ストレス耐性 IV (70 点以上)	3	18.7(1.5)	17.3(0.5)	18.7(1.2)	17.0(2.0)	71.7(4.2)

0.05 > p *

表5 生徒会活動経験の有無による領域別自己教育力の平均得点の比較 平均値(標準偏差)

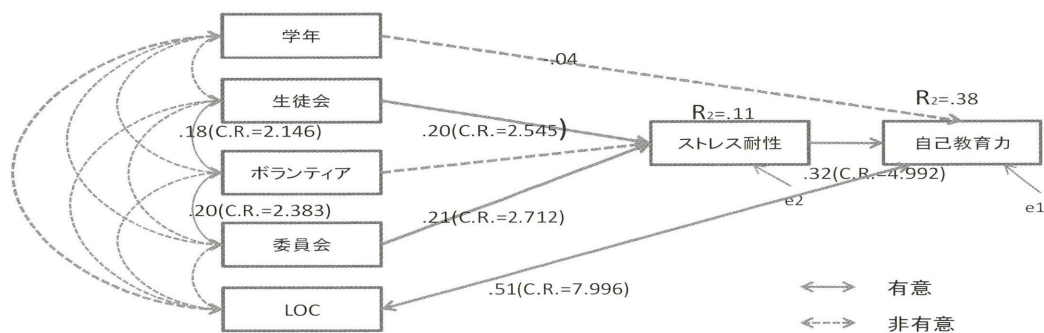
	経験	n	自己教育力				総合点
			学習の技能と 基盤	自己の対象化 と統制	成長・発展への 志向	自信・プライド・ 安定性	
生徒会活動 経験の有無	有り	11	16.0(2.8)	15.5(2.3)	18.1(2.0)	15.2(3.8)	64.9(9.2)
	無し	144	12.9(3.3)	15.1(2.4)	16.9(2.7)	12.7(3.3)	57.7(8.3)

0.05>p*

表6 委員会活動経験の有無による領域別自己教育力の平均得点の比較 平均値(標準偏差)

	経験	n	自己教育力				総合点
			学習の技能と 基盤	自己の対象化と統 制	成長・発展への 志向	自信・プライド・ 安定性	
生徒会活動 経験の有無	有り	31	14.0(3.7)	16.0(1.9)	18.0(2.4)	13.7(3.5)	61.7(7.8)
	無し	123	13.0(3.2)	14.9(2.5)	16.8(2.7)	12.7(3.4)	57.4(8.4)

0.05>p*



n=155, DF=5, GFI=.970, CFI=.897, RMSEA=.095, $\chi^2 = 16.977$

図2 自己教育力とストレス耐性と生徒会活動との因果関係

もそれに近い数値であった。RMSEAは0.08以下であることが求められるが、少しそれを上回った。「生徒会活動」から「ストレス耐性」へのパス係数は、0.20(C.R.値=2.545)5%水準で有意、「委員会活動」から「ストレス耐性」へのパス係数は、0.21(C.R.値=2.712)5%水準で有意、「ローカスオブコントロール」から「自己教育力」へのパス係数は0.51(C.R.値=7.996)5%水準で有意であった。「学年」「ボランティア活動」有意差はみられなかった。また、「ストレス耐性」から「自己教育力」へのパス係数は0.32(C.R.値=4.992)であった。説明率38%であった(図2)。

IV. 考察

本研究は、看護大学生を対象に、高校生時代の委員会活動、ボランティア活動、生徒会活動をしていた学生はポジティブな生活態度をもっていると仮定し、ストレス耐性が高く、ストレス耐性の高い学生は自己教育力が高い。ローカスオブコントロールの高い学生は自己教育力が高いという仮説のもと研究を行った。

1. 看護学生の自己教育力

看護学生の自己教育力は、「成長・発展への志向」の平均点が一番高く、この結果は、坪田¹⁷⁾の報告と一致していた。成長・発展への志向は、看護学生にとって、看護を学びこれから成長していこうとする動機や意欲の表れであると考えられる。一番得点が低かった領域は「自信・プライド・安定性」であり、この結果は、他の研究¹⁸⁻¹⁹⁾でも同様に報告されている。この「自信・プライド・安定性」は自己を肯定的にとらえているかであり、看護大学生の自尊感情の低さと青年期という特有の心の揺れなど心理的な面が自信の低さにつながっているのではないかと考えられる。また、「学習の技能と基盤」は、看護大学において直接育成される技能であり、その知識や技術を身につけ活用する技術でもあり、基礎的な知識・技術をきちんと修得できているか考えることが必要であり、学習によって獲得していく要素が強い。このことは、大学内の教育のあり方が大切であり、学生の学習をいかに支えて行くことが問われることになる。「自己の対象化と統制」については負荷量が低く、他の側面に分散されたがこの結果は川島²⁰⁾の報告と一致した。このことは本研究のデータが代表的なデータといえないこと、この尺度は看護師を対象にした尺度であることから西村と同様の結果が得られなかったと考えられる。

2. 看護学生の高校時代の活動とストレス耐性、自己教育力との関係

看護学生のストレス耐性は、分布よりみると、4割の学生がストレス耐性が弱いことが明らかになった。また、反面、問題のない人、耐性の強い人は6割であり、よい生活習慣、良い生活状態、ポジティブな生活態度を有

する群であった。つまりストレス耐性の弱い人は強い人に比べ、自己教育力が低いことが明らかになり、ストレス耐性を強めるためには良き生活習慣、良き生活状況、ポジティブな生活態度、よきソーシャルサポートなどを持つことの必要性が明らかになった。また、高等学校時代の委員会活動・生徒会活動がストレス耐性を高め、自己教育力を高めることから、小学校、中学校、高等学校において、「確かな学力」が育成されること、生徒会・委員会活動に積極的に参加できるような生きる力を持ち、学ぶことに対して、「興味・関心」を持ち、自ら主体的に学習活動に取り組む学習態度を身に付けた学生が入学してくることを期待すると同時に、その時代から良き生活習慣を身につけるよう期待したい。今回の調査では、自己教育力と学年との相関はなく、看護大学での、臨地実習における自己教育力の効果が現れなかったが、今後もストレス耐性に影響を及ぼす要因、自己教育力に影響を及ぼす要因を今後とも検討していく必要があると考える。

V. 結論

1. 高校生時代の委員会活動、生徒会活動をしていた学生は、ストレス耐性が高く、ストレス耐性の高い学生は自己教育力が高い。ローカスオブコントロールの高い学生は自己教育力が高いという仮説が検証された。

2. ストレス耐性の高い学生は低い学生に比べて、自己教育力が高い

3. 高校生時代の委員会活動、生徒会活動をしていた学生は自己教育力が高い。委員会活動においては、「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」、生徒会活動は「学習の技能と基盤」が高い。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、一大学の看護大学生を対象にしており、人数的にも少なく一般化は難しい。今後の課題として、第1に看護大学生の自己教育力を適切に測定できる尺度の選択、あるいは開発が望まれる。第2に自己教育力の影響要因を解明していくことにより、対象者の特性に適した教育プログラムを開発していく際の重要な示唆を得ることができる。第3に具体的な教育方略と効果についての研究を今後も継続して行くことが今後の検討課題といえる。

引用文献

- 1) 森敏昭, 清水益治, 石田潤: 大学生の自己教育力と高校時代の学習指導法の関係, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部, 第51号, 1-8, 2002
- 2) 看護学教育のあり方に関する検討会: 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標: 看護学教育のあり方

に関する報告書, 1-3,2004

- 3) 梶田叡一：自己教育への教育, 明治図書, 1985
- 4) 北尾倫彦編集：自己教育力を考える, 図書文化, 1993
- 5) 西村千代子, 奥野茂代：看護婦の自己教育力, 日本赤十字幹部看護婦研修所紀要, 11,22-39,1995
- 6) 平久江祐司：自己教育力を育成するための学校図書館利用指導—教育改革の観点から, 図書館学年報, 42(2),111-12, 1996
- 7) 伊藤まゆみ：課題解決学習を通して自己教育力の育成を目指す授業創り—学生が創る学習材で「自ら学ぶ意欲」を引き出す日本教材学会年報, 8,201-203,1997
- 8) 土屋世都子, 衛藤英子, 菊池恭子他：看護学生3年生の自己教育力の構造とそれに影響する実習方法—同一学生の縦断的調査より, 日本看護学会論文集, 看護教育, 29,33-35,1998
- 9) 池田敏子, 太田にわ, 中西代志子他：3年制医療技術短期大学看護学生の学習態度に関する研究—自己教育力育成のカリキュラム開発をめざして, 日本教育工学雑誌, 23(2),109-120,1999
- 10) 原厚子：本校学生の自己教育力の現状と看護職アイデンティティの関係, 日本看護学会論文集, 29,153-155,1998
- 11) 森敏昭, 清水益治, 石田潤：大学生の自己教育力に影響する要因は何か—学習目標, 原因帰属, セルフエフィカシー, および暗黙の知能観の影響, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部(学習開発関連領域), 50,1-8
- 12) 森千鶴：看護学生の自己教育力の構造と影響する要因の検討, 日本看護研究学会誌, 15(2)61,1992
- 13) 山本和彦：心理社会的ストレス度とストレス耐性低下度を評価する調査表の開発, 日本整理人類学会誌, 10(2),23-31,2005
- 14) 清水利信：学力構造の心理学, 金子書房, 1978
- 15) 鎌原雅彦, 樋口一辰, 清水直治：Locus of Control 尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討, 日本教育学雑誌, 30(4)38-43,1982
- 16) 桂戯作：あなたの健康百科—あなたのストレス耐性度は?
- 17) 坪田和美：看護基礎教育における自己教育力, 看護教育, 44(3)242-244,2003
- 18) 我妻幸子：臨地実習における臨床実習指導者のソーシャルサポートと看護学生の自己効力感の関連についての研究, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 28, 73-78, 2003
- 19) 新実夕香理：看護学実習における自己教育力と授業糧評価の変化およびその関係, 長野県看護大学紀要, 6,61-71,2004
- 20) 川島美佐子：看護学生の「自己教育力」に関する文献的考察, 足利短期大学研究紀要, 第27巻, 3, 2007

Factor affecting of student nurse's self-educating ability

～locus of control, stress-coping and influence of committee activity in high school days.～

MUTSUKO MICHIIHIRO¹⁾, YOSHIKO FUJITA¹⁾, MIHO ASAI²⁾

¹⁾Department of Nursing ,Faculty of Health Science Ube Frontier University

²⁾Okayama Rosai Hospital

Abstract

This study was aimed to clarify correlations among self-educating ability, the locus of control, and stress-coping ability in nursing students, and identify factors that could affect this stress-coping ability. The subjects were 182 nursing students of B University (A Prefecture). Based on their responses to a questionnaire, path analyses were performed. The results showed a strong correlation between self-educating ability and the locus of control in these students, and also revealed that their stress-coping ability had been strengthened through student-body and committee activities in high school. These findings suggest that nursing students' stress-coping ability can be increased by improving their self-educating ability; in other words, it is necessary to maintain a healthy lifestyle and positive attitude toward life.

Key words: nursing student, self-educating ability, locus of control, stress-coping ability